

# 高齢者の自覚

岸 恵子

(女優・作家)

ある年の暮れのこと。クリスマス休暇で来日していた私の唯一の家族と、鎌倉を回った。パリっ子として育った私の娘は、江の島を歩かないと日本へ来た気がしないと行って、「江ノ電」へ乗って一人でもよく出かけていた。

その日、ハンドルは娘に任せていた。私と同じで方向オンチだが、ナビの使い方が上手いし、運転も抜群である。楽しい小旅行を終え横浜の我が家へ向かった。

混みあつた近所の商店街をスイスイと器用に抜け、坂のてっぺんにある、我家の門まで来て、なぜかピタリと車を止めた。

「ママ、車庫入れをしてみて」

我が家は、三叉路の角にある。ガレージはそのまた角にあるので、三方からくる車を見ながらの車庫入れは難しい。

「死角になっている左からの車をみてくれる？」

「ダメ。お手伝いさんがいない時は一人で車庫入れをするんですよ？」

二人の孫が面白そうに笑っている。(ン？腕だめしか…)

私は運転がめっぽう上手いと信じている。仕事の時はマネージャーやプロデューサーの願望でタクシーを使うが、その他は自分でハンドルを握る方が心地よい。その日、三方からくる車

を器用によけて見事なガレージ入れをしてにんまり笑う私に娘が言った。

「ママン、免許証返納の時が来たのよ」

「えッ!?」私は目をひん剥いた。運転には100%自信があった。

(見ていろッ!) とばかり私はいつもの通り、

## 岸 恵子(きし・けいこ)



撮影・中西裕人

一九三二年八月一日、横浜生まれ。女優

として、「おとうと」

「雪国」「細雪」など。

一九五七年二四歳で結

婚のためフランスへ出

奔。以来四三年間フラ

ンス滞在。NHKB Sの初代キャスターなど

で、紛争地に赴きドキュメンタリーを。作家と

して、『ベラルーシの林檎』『砂の界へ』『30

年の物語』『わりなき恋』『孤独という道づれ』『岸

恵子自伝』などを上梓した。

まず前進してバックで車庫入れを完了したのに!

我が車庫は贅沢な間取りでガレージの前に、職人さんたちのトラックまで停められる広い余裕がある。問題は庭の植木を囲う石塀がまあるく弧を描いて張り巡らしてある空間なので、勢いよくバックすると、ドシンとぶつかってしまう。

「今までずっと入れていたのに、今は、二回も切り返した!」

「何回切り返しても、誰にも迷惑かけないでしよ。ガレージ広いんだから」

「町なかはガレージじゃないのよ。人を傷つけたらどうするの」

娘の声は落ちついて静かだった。

私は八二歳になっていたが高齢者としての自覚は毛ほどもなかった。娘の眼差しの中のやさしさが溢れる必死な説得に心底驚いた。

「ミミイ(孫たちがつけた私の綽名)車がないと淋しくなるね」

からかい気味に笑っていた孫たちが、私の眼を痛ましそうにのぞき込んで言った。まだ小学

生の幼いやさしさにも驚いた。

ハンドルを握って自由気ままにドライブすることが最高のリラックスだった私が、正直言って少し前から車庫入れが億劫になっていた。家族の心遣いにめげて、その日えいッ！と車を断念した。

我が愛車、グレイメタリックのローヴァーはまだ二万キロも乗ってはいない。それをレックカーが持ち去ったのは年が明けて二月中旬だった。なぜレックカー車だったのか：断念してからは二カ月間、一度も運転をしなかった。車のない生活に踏ん切りをつけるのに心情的に時間がかかったのだ。

その間に車検が切れていたので高いレックカー車代まで払う羽目になった。間の抜けた話である。

私がこのことを思い出したのは、今年九月二日、池袋暴走事件の加害者に禁錮五年の実刑判決が出た時だった。

当時八七歳だった人物が、ブレーキとアクセルを踏み違えて歩道を渡っていた若い母親と、三歳の可愛らしい幼児を轢き殺した悲惨極まり

ない事故だった。たとえ極刑が下ったとしても、最愛の妻と娘は帰ってこないのだ！

「むなしさに襲われた。二人は帰っては来ない」と言った後、夫であり、父である三〇半ばの若い被害者はしずかに呟いた。

「悲しみ、苦しみ、怨み、憎む。人と争っているわたしは二人が愛してくれたわたしではない。二人に愛される自分に戻ろう」

この言葉に感動して私の胸が震え、頬に涙が溢れた。

「人生一〇〇年」などと飛んでもない言葉がもてはやされている。

支えてくれる身寄りが無い限り、今現在の人間にたった独りで快適な一〇〇歳をまっとうする力はないと私は思う。

間違えてアクセルを踏み続けた事故当時八七歳の加害者は、嘗て高い要職について受勲したこともあるという。彼の悲劇は老いて劣化する自身の能力を自覚する能力が無く、それを指摘してくる身の回りにも恵まれていなかった。不幸なことと私は思う。